



Title	流れる「今」をあじわう：アートプロジェクトによる日常経験の変容
Author(s)	山下, 晃平
Citation	a+a 美学研究. 2025, 16, p. 94-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103420
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

佐久島と三河・佐久島アートプラン二一

住空間の質的変化

記憶のアップデート

人と出会う場の形成

アートプロジェクトによる日常経験の変容

流れる「今」をあじわう

——アートプロジェクトによる日常経験の変容

循環の美学と共生

アートプロジェクトによる日常経験の変容

本稿は、二〇〇〇年以降に日本の各地で誕生しているアートプロジェクトに注目し、開催地域で暮らす人々の日常生活がどのように変化しているのかについて論じる。そのために本稿では、二〇〇一年に誕生し、先駆的であるがまだ充分な研究がなされていない「三河・佐久島アートプラン二一」（愛知県）を取り上げる（以下、アートプラン二一と称する）。

二〇〇〇年以降、地域一円をフィールドとして繰り広げられる大型美術展は「芸術祭」と呼ばれるようになる。開催後もそこに事務局が残つて、地域の催しや歳事に関わるような例も多い^[1]。とくに、二〇〇〇年に新潟県越後妻有において始まった「大地の芸術祭」は、二〇〇一年ものあいだ地域経済やコミュニティと強く結びついてきた。地域において持続的に展開される芸術活動をめぐっては、美術史の側からではなく、環境デザインや文化政策の領域からの研究も盛んである。たとえば、社会学者の北田暁大の編集による論集『社会の芸術／芸術という社会』は、都市や地方、過疎地や観光地など、様々なエリアで展開する日本の芸術祭を取り上げて、アート活動にかかる搾取の構造や、文化政策に関する制度設計の問題について議論している^[2]。また『地域アート——美学・制度・日本』において、藤田はソーシャリー・エンゲイジド・アートの理論を参照しながら、日本の芸術祭や現代美術家の活動を検証し、地域貢献における制度疲労や芸術表現の前衛性と価値の問題について論じている^[3]。これにたいして、実地調査をおこなってきた橋本敏子は『地域の力とアートエネルギー』において、日本の複数のアートプロジェクトを分析し、芸術表現が「人々の日常生活に人を生かす力「アートエネルギー」を起こす」と論じている^[4]。

二〇〇〇年以降の日本のアートプロジェクトは、会期を定めずに、住民たちの普段の暮らしのうちにアートを染み込ませようとする傾向がある。そこでは、芸術家・芸術作品・鑑賞者という三者構造そのものが変化している。けれども、従来の研究はこの変化をうまくとらえきれていない。美術館の外でおこなわれるアートプロジェクトについて論じる場合でも、依然として、作品の質や、作品の鑑賞のありかたを問題にしがちである。そこで、本稿では、近年のアートプロジェクトの日常化のありようを分析して、芸術家・芸術作品・鑑賞者という三者構造がどのように揺らいでいるかを明らかにしたい。

本稿ではまず佐久島の環境とアートプラン二一の概要を確認する。そのうえで、アートプロジェクトにおける島民



図3 | 南川祐輝《イーストハウス》と周囲の様子

筆者撮影

現在の常設作品は、島内二二ヶ所と島外の一色港に二点ある。例え、東港渡船場の桟橋に、建築家の南川祐輝による《イーストハウス》(二〇一〇年)がある[図3]。芸術作品ではあるが、見晴台でありベンチを兼ねた構造体である。訪問者は上にあがつて波風を感じ、海辺の様子や遠くの船を眺めることができる。作品があるこの桟橋

住空間の質的変化

め、まずは佐久島が積み重ねた時間と空間に向き合うことから始めた[図3]。その結果として二〇〇一年に誕生したのが、「祭りとアート」をキーワードとするアートプロジェクト「三河・佐久島アート・プラン二」である。アートプラン二では、事務局・アーティスト・島民が連携し、様々な活動が会期を問わず生み出されている。作品の設置や「弁天サロン」という交流会館でのイベント、島民との協働による環境整備や新たな催しの企画などである。実際にプロジェクト誕生後には、徐々に島を訪れる家族連れや若者が増え、そのため渡船の本数も増えている。また島民あるいは島外から来た人が島でカフェを開店するようになった。港には旅館もあり、点在する作品を観るために宿泊する人もいる[図3]。このようにアートプラン二は、会期を持たず、島の一年の営みや歳事、風土に向き合いながら展開している取り組みである。



図2 | 歩いて島を散策する訪問者の様子

筆者撮影

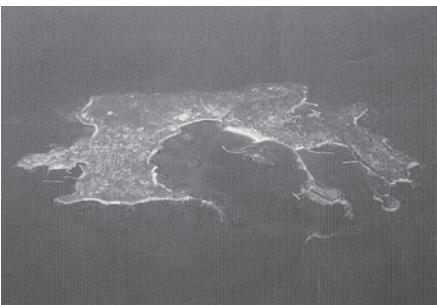


図1 | 上空から見た佐久島の様子

出典：パンフレット『佐久島体験マップ』
(オフィス・マッチング・モウル編、2002年7月発行)

の日常経験を、①住空間の質的变化 ②記憶のアップデート ③人と出会う場の形成という三つの視点から分析する。結果として、会期をもたないアートプロジェクトの存在が、つど立ち現れる「今」をあじわう「循環的性質」を地域住民にもたらしていることを明らかにする。この循環という感性的性質は、これまでの日常美学研究で論じられてきた豊かな住環境への志向とは質的に異なる[図5]。またそのような日常経験の質的変容が、共同体形成のための新たな力となっていることについて述べたい。

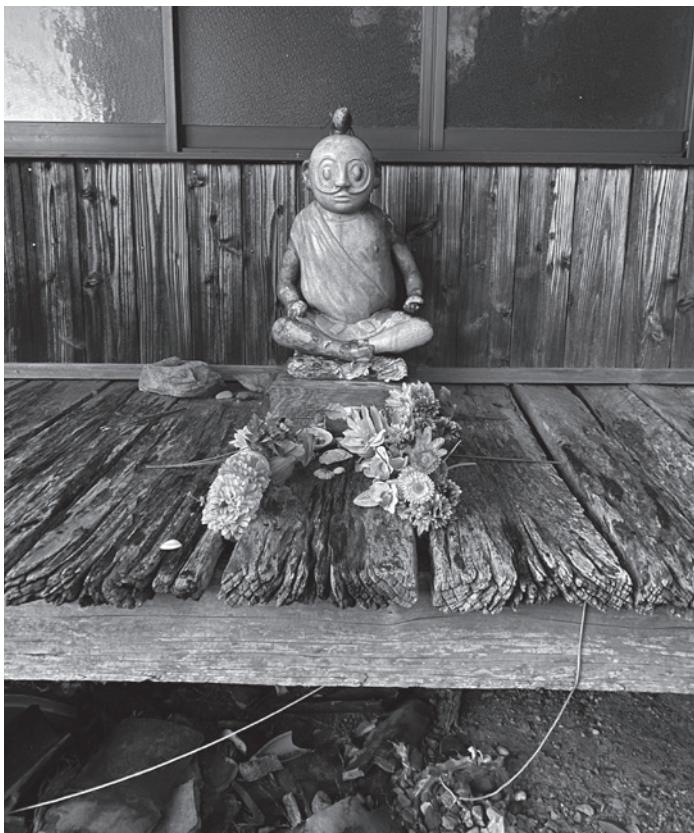
佐久島と三河・佐久島アート・プラン二

佐久島は愛知県の三河湾内のほぼ真ん中に位置する有人島である。東京デイズニーランドの約三倍の面積であり、三河湾内では最大の島である[図1]。江戸時代には海運業で繁栄した。八剣神社の祭事で披露される佐久島太鼓のような独自の文化を持つ。島内は一日あれば充分に散策することができる[図2]。この島に訪れるためには、町営の渡船を利用するしかない。佐久島は、見渡す限りの海の景色や散策可能な森、また波の音や潮の香りと、都会の喧騒とは異なる景観を持つ。

全国の多くの有人島と同様に、佐久島は加速する過疎化と高齢化、そして衰退する地場産業の問題を抱えている。そこで始まったのが、愛知県西尾市一色町による地域活性化施策である。一九九六年に国土庁（現在の国土交通省）の委員会「よい風が吹く島が好き女性委員会」が佐久島に視察に訪れたのを契機として、島民が「島を美しくつくる会」を発足した[図5]。そこで一色町役場から佐久島の活性化について相談を受けたのが、現在の事務局を務めるオフィス・マッチング・モウル代表の内藤美和である。内藤は行政と島民との連携を進

点在する作品を見るために、島外から家族連れや若者たちが島に来て散策するようになり、島民の日常が変わり始める。加えてアートプラン二一を契機として、島民は島内の歴史にまつわる活動にも取り組むようになる。二〇〇二年より六年間かけて進められた「佐久島空家計画」である。佐久島西区には伝統的な黒い板塀が並ぶ入り組んだ路地があるが、その中に明治時代に建てられ、四〇年間空き家となっていた民家があった。「佐久島空家計画」は、その

記憶のアップデート



(上) 図5 | 設置されたベンチの例。それぞれに造形的な魅力がある。

筆者撮影

(下) 図6 | 正念寺にある松岡徹《海神さま》の様子

筆者撮影

は、島民にとつては日々の作業場である。作品の一部が波風で朽ちた場合、島民は事務局と一緒に修繕もしている。島民の暮らしにより密に関わる作品もある。桟橋の先にある大島には海辺の公園があり、島の有志が梅の植樹を進めてきた。美術家の松岡徹による『佐久島のお庭』(二〇〇九年)は、その空間をユニークなオブジェやモザイクによって、小道や高台、休憩場所などへと作り替えたものである[図4]。この庭は島内の子ども遊び場所となっている。また、島民が実った梅を採取して梅干しにしている。訪問者に振る舞うこともある。まさに島民の庭としての空間が、よりユニークで散策の楽しが増す場へと変貌した。二〇〇八年には、建築科の学生による企画「すわるとこプロジェクト」が採用され、複数のベンチを兼ねた構造体が設置された[図5]。高齢化が進むとともにたたらす。このような「芸術作品」が住空間すなわち日常空間に点在していること、この点が重要である。上記以外にも様々な作品が設置されている。境内に置かれた『海神さま』(二〇〇三年)のようなオブジェもある[図6]。桟橋には木村崇人によるカモメを模した作品『カモメの駐車場』(二〇〇五年)もある。

このように佐久島に設置された作品群は、周囲と切り離された展示空間に置かれるのではなく、環境のなかに溶け込んでいる。また常設される作品が少しずつ増えていることも特徴的である。事務局・アーティスト・島民が連携して、作品のあり方や設置場所について検討している。このような作品が設置されることで、島民の生活空間はより感性が働く場へと変化した。島民は自分たちの生活空間を意識的に捉えるようになった[10]。



図4 | 松岡徹による『佐久島のお庭』の様子
筆者撮影



図8 | 竹内昌義(みかんぐみ)によって修復された祠
筆者撮影



図7 | 《大葉邸》(右側)と黒壁のある路地
筆者撮影

空き家をアーティストの力を借りながら修復する取り組みである。アーティストの平田五郎が滞在制作を行い、事務局と島民、そしてボランティアの協力によつてこの企画は進められた。島民がボランティアの宿泊先を用意した。庭に石を敷き詰め、床や扉を黒く塗り替える作業が進められた。最終的に民家は、部屋の光と影そのものが活かされた作品空間《大葉邸》(二〇〇八年)として生まれ変わった^[11]〔図7〕。弁天サロンに有志が集い、墨をすつて墨液を集める作業も行われた。潮風から家を守る黒壁は、まさに佐久島の歴史と記憶そのものである。このように近隣の住空間を整備し、その空間を守つていくことは、島民にとってコミュニティの継承そのものである。

コミュニティの記憶に関して、「佐久島弘法プロジェクト」というさらに実践的な活動も誕生した。二〇一〇年から三年計画で、島内の八十八カ所に点在する小さな弘法大師の祠を建築家とアーティストによつて蘇らせる試みである。佐久島にも一九一六年頃から四国八十八カ所巡りを模した「写し靈場」が存在し、戦前には多くの巡礼者が本土から訪れていた。この祠は島内に広く点在し、それぞれに檀家として管理している島民がいる。しかしその祠は長い時間が経過して脆くなり、壊れてしまつてゐるものもあつた。一つの祠が生まれ変わると、島民からさらに修復の相談が事務局にもたらされた^[12]〔図8〕。また祠を巡るためには、案内板が必要となる。今や様々な路地に設置されている案内板は、愛知県内の美術大学の学



図11 | 「Ooyaoyacafe もんべまるけ」の様子

筆者撮影



図10 | 島民のコミュニティスペースである弁天サロンの様子

筆者撮影

図9 | 島内のあちこちに設置された案内板
筆者撮影

生によって制作された。学生たちは佐久島小学校の子どもと一緒に場所決めを行った「図9」。

さらにアートプラン二ーを契機として、島民による新たな提案も生まれている。それが現在も続く「佐久島太鼓フェスティバル（太鼓祭り）」である。佐久島太鼓はもともと毎年秋の一〇月に大漁と豊作を祈願して行われる佐久島最大の祭事であった。しかし、アートプラン二ーの始まりがきっかけとなり二〇〇一年に島民は、大漁旗で西地区の会場を飾り、佐久島太鼓を訪問者に披露することを考案した^[13]。佐久島太鼓の披露は島民を奮い立たせ、さらに二〇〇九年からは愛知県内の太鼓チームが佐久島に訪れて佐久島太鼓と競演する企画「佐久島太鼓フェスティバル（太鼓祭り）」に展した。

以上のように、アートプラン二ーは島内の住空間を変え、島の記憶を呼び覚ます契機となっているが、このいとなみは当然ながら島民と島外の人が出会う新たな場を生み出している。

アーティストは、作品設置だけではなく、滞在を通して島民や子どもと交わってきた「図10」。先述した松岡徹は、二〇〇一年に弁天サロンで島民とワークショップを行っている。そのワークショップは、粘土を用いて自分たちの思い出を形にし、それを照明作品に変えるものだった。このワークショップには島民の子どもから七〇代の人まで様々な年齢層が参加した。島民が作った照明作品は、一月の「八日講祭り」という無病息災の厄払いの祭事に合わせて準備された。当日は「夜会」として島民や訪問者が弁天サロンに集い、食事をしながら作品鑑賞をした^[14]。貝殻などの海岸漂流物を集め立体を作成する荒木由香里もまた、二〇〇八年に弁天サロンでワークショップを行っている。松岡や荒木のように、アートプラン二ーでは同

人と出会う場の形成

ジアーティストが繰り返し島を訪れる。アーティストは年を重ねて島に慣れり、島民との一体感を増していく。

またアートプラン二ーは「祭りとアート」をテーマに掲げている。アートプラン二ーが誕生した二〇〇一年八月は、島の筒島弁財天が一二年に一度の大開帳を行う時期でもあった。松岡は、学生やボランティアと一緒に弁財天にある遊歩道の竹林を「筒島インスタレーション」として創造空間に変えた。また島民と手作りの提灯を作り、大開帳と盆踊りに新たな装いをもたらした。実際に、弁財天堂を訪れた人は例年の四、五倍であつたという^[15]。このような祭事を更新する行為は、まさに事務局・アーティスト・島民の相互理解と連携によって達成されたと言える。

アートプラン二ーはまた、島民と訪問者とのつながりも生み出している。たとえば、先述した『大葉邸』では、二〇〇七年より秋になると佐久島の伝統菓子である「かしや餅」作りと茶会が催されるようになつた。島民と訪問者とが一緒になってかしや餅を作り、茶会では島民が抹茶をふるまう。訪問者にとつては格好の休憩所であり、島民にとってはおもてなしの機会となつていて。あるいは佐久島の変化に応じるように、島民や訪問者自身がカフェを営むようになつていている。散策の合間のカフェは貴重な休憩所であり、まさに人が集う場所である。たとえば、西港側にはカフェ「もんべまるけ」があるが、島外の人が佐久島を気に入り、民家を改装したものである「図11」。創作料理が人気で、多くの訪問者で賑わう。あるいは元々漁師をしていた人が、二〇二一年に黒壁集落のすぐそばにカフェ「うる」を開店した「図12」。このようにカフェの数が少しづつ増えている。このことは、アートプラン二ーが佐久島の住環境にもたらした大きな変化の一つである。

証法的なアップデートは、「都市祭礼研究者である和崎春日が述べる「異質性の衝突と拮抗のなかに、相違を貫く普遍性が体得される」という「アーバン・エスニシティ」に近い性質であろう^[16]。訪問者が手にするアートプラン二ーの案内パンフレットには、「アートな島めぐり」と示されている。「島でアートめぐり」とは記されていない。芸術鑑賞で想定される作品と場との関係性が佐久島では逆転する。さらにつきこの「島めぐり」という舞台は、訪問者が旅先で期待する観光地ではない。訪問者が散策するのは、島民の日々のいとなみの場、日常空間である。アートプラン二ーは、日常空間に祭礼的なハレの場が融合する特異な空間を生じさせており、その結果として、祭事とは質的に異なる共同体形成のための活力をもたらしているのではないか。重要なことは、島民の日常的営為に「持続的な」美的経験がもたらされていることである。決して演劇的で祝祭的な強い感動や一体感という作用ではないが、島民の日常経験に浸み込んでくる感性的性質が生じている。すなわち、この「持続的な」美的性質とは、つど立ち現れる「今」という履歴をあじわう感性と言える。「アートな島めぐり」という構造によって、島民も訪問者も互いを認識し合いながら、「変わらずにある日常」を味わう。この感性的性質は、循環の美学として捉えることができる。まさに生きるための感性的性質である。西洋由来の発展的で啓蒙的な概念とは質的に異なるものであろう。

美学者の津上英輔は、美や芸術に留まらない現代社会に適応する感性論を検討し、その際の感性的な性質を「あじわい」と称する^[17]。津上は「あじわう」ことを、主体が「すぐれて感性を働かせている」と定義する。そのあじわいの例として観光や旅に注目し、「観光とは世界を感性化する心の構え」と捉える^[18]。しかしながら、島民が「あじわう」佐久島は、観光地ではなく日常空間である。日常経験の基層にアートプラン二ーという創造活動が定位する。この特異な生活基盤が、つど立ち現れる「今」をあじわうという持続的な構造を生み出す。アートプラン二ーを通して、循環的な日常が美的経験の対象として、島民（や訪問者）につど立ち現れる。この循環という感性が、持続的な共生への志向を「緩やかに」育んでいる。

このような会期を定めない持続性と共同体形成という視点は、今日のソーシャリィ・エンゲイジド・アート研究においても重要であろう。佐久島は、アートプラン二ー誕生後の二〇〇八年に、「にほんの里一〇〇選」に選出されている。



図13 | 祇園祭の会所飾りの様子
筆者撮影



図12 | カフェ「うる」の様子
筆者撮影

以上、アートプラン二ーが島民の日常経験にもたらした変化を、①住空間の質的变化②記憶のアップデート③人と出会いう場の形成という三つの視点から分析した。現在、二点の作品が、島民の生活空間に少しずつ設置され、住空間に質的な変化をもたらしている。それらの作品は、いわゆる西洋由来の美的で批評性のある「芸術作品」というよりも、むしろ場に溶け込んだ構造物である。「飾り」とも言い得る。設られた作品群は、港の桟橋や路地、散歩道など島民の暮らしの中にあり、事務局・アーティスト・島民の連携と協働によって保たれている。三者による協働的な営為が、島民の日々の暮らしに豊かな感性的経験をもたらしている。またアートプラン二ーの活動は、展示という美術制度から逸脱し、佐久島の歴史や祭礼へと接近している。黒壁や古民家、あるいは弘法太子の祠を修復して現在に蘇らせる取り組みは、島民にとつては記憶の更新であり、継承すべき地域のアイデンティティに関わる。祭事に創造空間や道具を設える行為は、たとえば、京都の祇園祭の宵山で見ることができる「会所飾り」にも類似する^[19]。

アートプラン二ー誕生以後の佐久島には、島民同士あるいは島民とアーティスト、そして島民と訪問者と、人が集いまだ去つて行く場が生まれている。注目すべき点は、事務局の内藤やアーティストのように、島外の者がかかわっていることにある。島民たちだけで住空間を変えたのではない。いわば、近世の俳人のように外部の芸能者を招き入れることで、島民の生活環境が変化し、島の記憶のアップデートが起きている。こうした記憶の弁

循環の美学と共生
——「変わらずにある日常」をあじわうということ

アートプロジェクトによる日常経験の変容

流れる「今」をあじわう

山下晃平

生きることの美学



(右) 図14 | 兼松豊による「子供たちとうたおう」
沖島の路地で歩きながら子どもとの演奏を楽しむ様子
出典:『BAO 1990』(1991年) 64頁

(左) 図15 | 国東半島芸術祭での「お接待」の様子
筆者撮影

本稿は、愛知県三河湾内の有人島である佐久島に二〇〇一年に誕生したアートプロジェクト「三河・佐久島アートプラン二二」を取り上げ、島民の日常経験の変容を分析した。アートプラン二二はもはや会期を持たず、また主会場とされる舞台も設定されていない。このような地域一円をフィールドとするアートプロジェクトが、地域住民の暮らしの質を変容させる。事務局と住民、アーティストと住民、そして訪問者と住民と、人が来てはまた去っていく持続的な「集いの場」が形成される。過疎化と高齢化が進む地域に、地域住民と域外の者とが交わる場が生まれる。常設された作品の存在が、異質な者を招き入れる契機となる。波止場や路地のような日常の場に床間のような設らいの空間が発生し、住民はすぐれて感性を働かせる。事務局・アーティスト・住民による協働は、佐久島での黒壁や祠の修復のように地域の歴史や記憶を呼び覚ます。このような人の流動性や場の記憶の更新という持続的なプロセスによって、地域住民の日常空間は、ハレとケとが融合した特異な場へと変貌する。その結果として、あたかも祭礼構造のように、地域住民は終わりなき「今」をあじわう。本稿ではこの感性的性質を循環の美学と捉えた。

このような住民の日常経験に関与するアートの試みは、佐久島だけではない。遡れば一九九〇年に琵琶湖の有人島である沖島で開催されたアート・フェスティバル「BAO in 沖島」にその兆しがある。「BAO in 沖島」は、滋賀県の若手作家によつて形成されたBiwako Artists' Organization によつて企画された。沖島に、現代美術家やパフォーマー、そして民族音楽の演奏者たちが集い、島民との交流を行つてゐる。「BAO in 沖島」は一ヶ月間の一度かぎりの開催ではあつたが、島の小学生とのワークショップや島民との演奏会など、アートプラン二二と類似する^[19]「図14」。あるいは二〇〇七年に群馬県中之条町で「中之条ビエンナーレ」、そして二〇一〇年に大分県の国東半島で「国東半島芸術祭」が誕生している。これらの芸術祭においても、地域住民が地元の料理を振る舞い、訪問者と住民とが接点を持つ場が生まれて いる「図15」。当然ながら設立経緯や組織など異なる点は多岐に渡るが、事務局が地元に接続点を持つ場が生まれて いる「図15」。当然ながら設立経緯や組織など異なる点は多岐に渡るが、事務局が地元に接続

て長く持続している点がアートプラン二二と共通する。このような欧米由来の美術制度から「逸脱」したアートプロジェクトでは、終わりなき現在に都度向き合つていく循環の感性が生まれ、地域住民にとつて生きるための潜在的な力として機能してゐるのではないか^[20]。この循環という感性的性質が、地域的共同体の形成と密接に関わる。循環の感性と共生との交又が重要である。

人々が来てはまた去つていく集いの場は、一期一会の場となつて いる。見知らぬ人たちと出くわす場所でありながら、日常空間でもあるという特異な場が、佐久島には形成されている。島でのアートプロジェクトは、住民の暮らしのなかに溶け込んで「アートな島めぐり」へと変質しており、美術展がほとんど島の日常となつて いる。二〇一四年、佐久島の小径に、横山将基によるアート作品《反射——風景／色》があらたに設置された。アートプラン二二に終わりはない。今日も、島民と訪問者との一期一会の場が生まれて いる。島民たちはアートをはらんだ日常空間を今日も行き来して いる。

山下晃平（やました・こうへい）

京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程修了。博士（美術）。現在、神戸学院大学人文学部講師。専門は、近現代の芸術論、表象文化論、日常美学。

- ^{*1} — 一九六〇年代から二〇〇〇年代にかけての日本の野外美術展の変遷や構造については、拙著『日本国際美術展と戦後美術史』(創元社、二〇一七年)でも取り上げている。
- ^{*2} — 北田暁大・神野真吾・竹田恵子編『社会の芸術／芸術という社会——社会とアートの関係、その再創造に向けて』(フィルムアート社、二〇一六年)。
- ^{*3} — 藤田直哉編『地域アート——美学・制度・日本』(堀之内出版、二〇一六年)。
- ^{*4} — 橋本敏子『地域の力とアートエネルギー』(学陽書房、一九九七年)。
- ^{*5} — 「感性」という用語は、イマヌエル・カントをはじめ、近代以降の様々な美学者がその定義について論じている。本文では、本文でも取り上げる美学者の津上英輔による定義「感性とは、目や耳などの諸感覚器官と想像力とを使って感じ取る働き」を採用する。津上英輔『あじわいの構造——感性化時代の美学』(春秋社、二〇一〇年)一三頁。日常美学に関しては、ユリコ・サイトウの著作『日常美学』Yuriko Saito, *Everyday Aesthetics* (Oxford University Press, 2007) がよく知られる。また、サイトウの理論あるいはアレン・カールソンやアーノルド・バーリアントら主要な環境美学者の研究状況を精査した論考としては、青田麻未『環境を批評する——英米系環境美学の展開』(春風社、二〇二〇年)も注目される。
- ^{*6} — パンフレット『佐久島体験マップ』オフィス・マッチング・モウル編(二〇〇一年七月発行)参照。
- ^{*7} — 二〇二三年一月二二日、筆者は愛知県岡崎市にて事務局であるオフィス・マッチング・モウル代表の内藤美和氏にインタビューを行った。
- ^{*8} — 内藤が採用した手法は、哲学者の桑子敏雄が提唱する「空間の履歴」の思想に通じるだろう。桑子は人間形成と環境との関わりを「履歴をもつ空間での身体の配置」と捉え、人の個性は場の履歴を蓄積することで育まれると論じている。桑子敏雄『感性の哲学』(日本放送出版協会、二〇〇一年)一九八頁。
- ^{*9} — 三河・佐久島アートプラン二一是、二〇〇三年に『全国地域づくり推進協議会会長賞』を受賞している。実際に観光客数は、二〇〇四年度に三万六千人から二〇〇九年度、二〇一〇年度に一万人ずつ増加し、二〇一二年には七万五千人と増加している。藤原勇彦『第三回 風土と溶け合うモダンアート 次のステップは定住促進(ルポにほんの里一〇〇選)』『グリーンパワー』四一五号(森林文化協会、二〇一三年)三三頁。
- ^{*10} — 日常空間の感性論としては、青田麻未が取り上げているようにアルト・ハニアラの論点、日常生活における「親しみ」と「新奇さ」の理論も参照できるだろう。青田麻未『ふつうの暮らし』を美学する(光文社、二〇一四年)。しかしながら佐久島は『三河・佐久島アートプラン二一』というアートプロジェクトによって観光と日常空間との境界が未分となり、その親しみの対象である日常空間がより感性化されているところが異なる。
- ^{*11} — 三河・佐久島アートプラン二一の活動を紹介するパンフレット『佐久島からの手紙』七巻(二〇〇二年新春号)に詳しく記されている。なお『大葉邸』という名は、持ち主の名前「大葉勝」に由来する。『佐久島からの手紙』四巻(二〇〇一年)参照。
- ^{*12} — 二〇〇二年に「弘法巡り」として歴史を巡るツアーも実施されている。島内の子どもも参加し、スタンプラリーが人気だったという。『佐久島からの手紙』六巻(二〇〇二年)参照。
- ^{*13} — 『佐久島からの手紙』三巻(二〇〇一年)参照。二〇〇一年一〇月の太鼓祭りでは、島民からの提案で、佐久島小学校の生徒二〇名が「佐久島ソーラン」を訪問者に披露する催しも行われた。
- ^{*14} — 『佐久島からの手紙』四巻(二〇〇二年)参照。島民が制作した照明作品は、弁天サロンの隣にある漁具倉庫に展示された。
- ^{*15} — 『佐久島からの手紙』二巻(二〇〇一年)参照。
- ^{*16} — 和崎春日『大文字祭礼の都市人類学的研究——左大文字を中心として』(刀水書房、一九九六年)五一二頁。
- ^{*17} — 津上英輔『あじわいの構造——感性化時代の美学』(春秋社、二〇一〇年)ii頁。
- ^{*18} — 津上英輔『Souvenir——観光体験の額縁』西村清和編『日常性の環境美学』(勁草書房、二〇一二年)、二三〇頁。
- ^{*19} — BAO 九九〇)(BAO [Bawako Artists' Organization] 一九九一年)参照。
- ^{*20} — 芸術表現と逸脱の感性については、拙論「展示」という制度と大衆——文化の基層構造から美術制度を捉える」(加須屋明子編『芸術と社会——表現の自由と倫理の相剋』(中央公論美術出版、二〇一四年)七三一一二頁)も参照。

本研究はJSPS科研費23K12043の助成を受けたものです。